

お股の緩い後輩ちゃんはすぐおしっこ漏らしちゃう♪  
「先輩い～……おしっこの匂い嗅がないでくださいい……」

	トラック01
天音	「ひゃーっ、どんどん雨強くなってきたー！ 天気予報では降らないって言ったのにー！」
天音	「あっ、先輩、あそこ！ あのバス停行きましょー！ 雨宿り！」
天音	「はーっ、はーっ………もー、びしょ濡れ……折り畳み傘くらい持ってくれば良かったです……」
天音	「先輩も結構濡れちゃいましたけど、寒くないですか？ 大丈夫ですか？」
天音	「ふえ？ わ、私？ 私はカバンを傘代わりにして走ってましたから……えへへ、まあそれでも結構濡れちゃいましたけど大丈夫です♪」
天音	「って……私の心配よりも先に自分の心配をしてくださいよね！ んもう……」
天音	「……それにしても……はあ……雨、しばらく止みそうにありませんね」
天音	「不幸中の幸いじゃないですけど、このバス停、雨漏りはしてないみたいですね」
天音	「もうだいぶ古いし今は使われてないから中もびしょびしょかもって思ったんですけど……椅子は乾いてて座れそうですしよかったです」

---

天音 「……先輩、今日はすみませんでした。私の居残り練習に付き合ってさえいなければ先輩は先に帰れたのに」

天音 「ふえ？ 気にしてない、ですか？ ……いえ、やっぱりダメです。私が気にするんです。先輩は優しいから、絶対そう言うと思ってましたし……」

天音 「……っていうか、なんでずっとうつぶいてるんですか？ 椅子、ちよっと汚れてますけどちゃんと座れますよ」

天音 「……雨、いつ止むかわからないですし、少し座って休んだほうがいいと思いますけど」

天音 「え？ 私の制服……って、わっ！ シャツ透けてる！？ はうう……な、なるほど……だからさっきから目線を背けてたんですね……」

天音 「あー……べ、別に、い、いいですよ？ ほら、見えてるって言ってもブラだけですし……そ、そうです！ ブラなんて突き詰めればただの布じゃないですか！」

天音 「そんな、ただの布を見られたからって恥ずかしい訳……恥ずかしい……わけ……う、ううう……」

---

---

天音

「え、ええっと……やっぱりそのう……あのう……正直いうと、恥ずかしくは、あるんですけど……ちよつとだけですから……我慢できる範囲ですから……」

天音

「それより、私の我儘で先輩を立ちっ放しにするほうが申し訳ないので……ね？　ほらここ。私と一緒に座りましょ？」

天音

「はい、本当に大丈夫です。後から怒ったりしませんから……あんまりジロジロ見られると恥ずかしいですけど」

天音

「でも……先輩になら別に見られてもいいし……むしろ見られたいっていうか……」

天音

「って、ああ！　いえいえ！　何でもないです！　何でもないですから……！」

天音

「は、はい、本当に……どうぞどうぞ」

天音

「先輩……別にそんな離れた所に座らなくても……」

天音

「もっとこっち、私の近くに来ていいですよ？　……え？　そこでいいんですか？　まあ、それならそれでいいですけど」

---

---

天音

「……って、あのう、先輩？ こっちを見ないよう  
にしてくれる気遣いはすごく嬉しいんですけど、  
そこまで露骨に視線を外されると……それは  
それでちよつと傷つきます……」

天音

「でも……そういう目で見てくれるんですね……  
ちよつと意外です……」

天音

「ふえ？ そういう目っていうのは、そのう……あ  
れですよ……え、エッチな目、っていう意味です  
……」

天音

「だ、だってえ……！ 先輩、普段は私の事女の子  
として見てくれないじゃないですか！ こう友達  
感覚っていうんですか？ いつもそんな接し方  
すもん……！」

天音

「先輩と出会ってから割と経ってますけど、私だっ  
て女の子なんですよ？ もうちよつと意識して欲  
しいな……とか思ったりする訳で……」

天音

「あ！ だからって今すぐ女として見ろって言う  
訳でもなくって！ そうじゃなくって……！」

天音

「……って、あ、あはは……私……何言ってるんだ  
ろ………今の話、忘れてください……あうう……  
……」

---

---

天音

「あー……えへへ、ほんといつまで降り続くんだすかね……このまま暗くなるまで止まなかったら、さすがに濡れて帰るしかないですね」

天音

「ん……くしゅっ！ あ、えへへ……大丈夫です。ちよっと冷えただけなので……」

天音

「でも、もしこのままずっと冷えたら風邪ひくかもですから……ね、先輩……もつとこっちに寄って私の事温めてくれませんか？」

天音

「おしくらまんじゅうみたいに密着する必要はないんですけど……少しでもお互いに身を寄せ合った方が離れてるよりはマシだと思いますし……」

天音

「それにいい加減先輩と顔を合わせてお話したいですから」

天音

「はい、私は本当に大丈夫です。見られたって言うてもブラですから……そりゃ、おっぱいの形とか大きさはちよっとわかっちゃいますけど」

天音

「先輩になら……見られても大丈夫ですので……」

天音

「……むう……女の子がここまで言ってるんですから、いい加減こっち向いてください！ んん……えいっ！」

---

---

天音

「はあ……やっとこっち向いてくれましたあ……えへへ、ね？ 別にシャツの上からブラが見えたって大したことないでしょう？ 小学生の頃なんてジャージが透けて当たり前でしたし……」

天音

「そ、それですね？ ど、どうですか？ 私のお……そのお、おっぱいは？」

天音

「ううう……だ、だってえ！ ブラ越しとはいえ、自分から男の人におっぱい見せつけたのなんて初めてですもん！ って、別に見せつけてるつもりはないんですけどね！」

天音

「でも結果的にこうやって見せちゃってる訳でして……」

天音

「せ、せっかく乙女のおっぱいを見せてあげてるのに何も感想をくれなかったら、まるで自分に魅力が無いって言われてるみたいで嫌じゃないですかあ！」

天音

「だ、だからですね？ はうう……何か言ってくださいよお……せんぱい……」

天音

「ふえ？ お、大きくて綺麗、ですか？ 別にクラスにはもっと大きい子もいますけど……」

天音

「ま、まあ……そうですね……小さいほうじゃ、ないっていう自覚はあります……」

---

---

天音

「あうう……これ、想像以上にヤバイですよ……面と向かってそういう事言われるの初めてで……あうう……顔赤くなっちゃいますう……」

天音

「って、先輩ったら凄い目力……もしかして、そのう、私のおっぱい……興味……あったりします？」

天音

「えっ？ ほ、本当に？ 自分で言うのもあれですけど、私なんかよりおっぱい大きくて柔らかくて可愛い女の子、いっぱいいますよ？ ほ、本当に私なんかのおっぱいに興味あるんですか？」

天音

「はええ……そ、そっか……そうなんです……興味、あるんですね……」

天音

「あ！ いえいえ！ 謝らないでください！ 聞いたのは私なんですから……先輩は何も悪くないです」

天音

「そういうふうに、その、おっぱいに興味があるのも……男の人なら当然だと思うし……むしろ私なんかのおっぱいに興味を持ってくれて嬉しいですし……」

天音

「……………いいですよ？ もう見られちゃってますし……私なんかのおっぱいで良ければ、好きになだけ見てください」

---



---

天音

「……あー……あはは……うん、え、ええっと……はううう……先輩、気づいてます？ 目、すっごい開いて、鼻の下、のびてますよ？」

天音

「ふふ♪ あ、いえいえ♪ 別にバカにしているとかわじゃないんです。ただ、そのう……何だか可愛くなって思っただけで……♪」

天音

「先輩って、普段は部活と勉強を両立してる生真面目な優等生っていうイメージでしたから、えへへ♪ いつものギャップが面白くて♪」

天音

「何だかいい意味で先輩ともっと近づけたなあって感じて……ちよっぴり嬉しくなっちゃいました♪」

天音

「ええ？ 別に格好よくなかったっていいじゃないですか。ずっと他の人の目を気にして生活してちゃ疲れちゃいますよ……？」

天音

「幸い今は私と先輩しかいませんし、雨の中こんな寂れたバス停にわざわざ来る人もいないでしょうから……」

天音

「好きなだけ、その、私の事……私のおっぱい……見てくれていいですよ？」

天音

「今だけ……私の前でだけは、格好悪い先輩でもいいですから……本当の先輩を……男の子な先輩を、私に見せてください……♪」

---

	トラック02
天音	「んあ……あうう……はあゝ……なんか変な気分……先輩がこっち見てるだけなのに……顔熱くなってきた……ううう……落ち着かない……」
天音	「そりゃ、ブラは見えちゃってますけど……その下……乳首が見えてるわけじゃないのに……」
天音	「……体が熱くて……心臓がドキドキしちゃって……あははっ、こんなの変ですよ。もしかしたら風邪ひいちゃったのかも……」
天音	「ふえ？ 先輩も同じ……なんですか？」
天音	「そう、なんですね。先輩も……ドキドキ、してるんですね……そっか……えへへ、ちょっと安心しました」
天音	「じゃあ……今……私と先輩、～人共同じ事、考えてるのかな……」
天音	「だって、先輩ったら私の事ばかり見てるから気づいてないかもですけど……先輩だって、そのう……シャツ、透けてますよ？」
天音	「お互いに異性の胸を見せあっちゃって……えへへ、傍から見たら変態さんですね……あははは……」

---

天音 「……はうう……先輩って結構……その、たくましいんですね………てつきりもうちょっと痩せてるのかと思ってました」

天音 「シャツがぴっちり張り付いて、筋肉が浮き出てて……女の子とは違う、がっちりした体……」

天音 「すごく、男らしくて……いつもの優しい先輩の印象がちよっと変わります」

天音 「えっと……変な事聞いちゃうかもですけど……男の人の胸って……やっぱり硬いんですか？」

天音 「女の子はどれだけ鍛えてもおっぱいは柔らかいままですし……男の人の胸、興味あります……」

天音 「なんでも、鍛え抜かれた筋肉は石のように固いとか……」

天音 「……あのう……もしかしたらそのう……先輩の胸……さ、触ってみても、いいですか……？」

天音 「……えっ！？ い、いいんですか！？ あ、いや、すみません、大きな声出しちゃって……」

天音 「そんな簡単に触らせてくれるとは思って無くて……やっぱり男性と女性じゃ胸を触らせる行為の重みが違うんですかね……」

---

---

天音

「……あのう……先輩？　もしかしてなんですけど、日頃から私以外の女の子にも、こうやって気軽に胸を触らせてたりします……？」

天音

「ん、まあ別に？　先輩の胸は先輩の物なんですから、私がとやかく言う筋合いはないんでしょうけど……」

天音

「でも何かこう……胸の奥がモヤってするというか、なんというか……先輩が誰彼構わず他の子に体を触らせてたらと思うと、今この体験が特別じゃなくなるというか……感動が薄れるというか……むうう……！」

天音

「……ふえ？　あ、そ、そうなんですか？　女の子に触らせるのは私が初めて……そ、そっか……私が初めて……えへ♪　えへへへ……♪」

天音

「つて、はわわっ！　す、すみません……変な声出しちゃいました……」

天音

「で、では……改めまして……先輩のお胸……し、失礼します……」

天音

「わっ、硬い……」

天音

「石みたいって言うのはちょっと大袈裟ですけど……でも、思ってたよりもずっと硬いです」

---

---

天音 「へえ……これが先輩の胸……ああ……硬くて逞しい……先輩のお胸……」

天音 「あ……先輩の……心臓の音、感じます……トクン、トクンって……本当にドキドキしてるんですね……」

天音 「ああ……先輩が生きてる音……先輩の心の音……すごく落ち着く音……もっと……手で触れるだけじゃなくて、耳で感じたいです……」

天音 「ああ……えへへ……♪ 先輩……すみません、急に抱き着いちゃって……」

天音 「でも、どうしてもこうやって先輩の熱を、鼓動を感じたくて……もう少しこのまま……私の事、抱き留めてください……」

天音 「その代わり、先輩も私の鼓動、感じてくれていいですから……ぎゅって抱きしめて、おっぱい越しに私の鼓動……私のドキドキ、感じてください……」

天音 「ああ……♪ 先輩……ん、えへへ……♪ 力強くあったかい……はい、いいですよ？ そのまま目を閉じて、私を感じてください」

天音 「はあ……ふうう……ん……ん……はああ……先輩……ふふ♪ 鼓動が速くなってます……♪」

---

---

天音 「私と抱き合ってるのが恥ずかしいんですか？ えへへ、照れ屋さんで可愛い……♪」

天音 「って、私も先輩の事言えないですよね……うう……自分でも分かります……私もドキドキしすぎて……顔、熱くなってますもん……」

天音 「あうう……わ、笑わないでください……！ もう……そんな意地悪な先輩にはお仕置きです！」

天音 「んん……それ！ すりすり……！ すりすり……！ んん、こうやってえ……頭押し付けてくすぐつてあげます！」

天音 「んん……すりすり……すりすり……すりすりすりすり……♪」

天音 「って、わっ！ わわっ！ せ、先輩？ 急にどうしたんですか？ そんな体ビクうってさせて……」

天音 「あ、何だかコリっとしたのが顔に当たって……って、こ、これ……って！？」

天音 「は、はわっ！ はわわっ！ せ、先輩！？ これ……先輩の乳首、ですよね？」

天音 「はわわ……乳首ピンと立っちゃって……もしかして先輩、今興奮してるんですか？」

---

---

天音

「だ、だって！ 乳首勃起させちゃうなんて……その、性的に興奮した時じゃなきゃ普通ないですよ？ 女の子もそうですし……」

天音

「ふああ……そっか……先輩、私に抱きしめられて乳首たっちゃったんだ……」

天音

「ぶ……あははっ♪ なんだろう……ちよっと面白くて……すっごく嬉しい……♪」

天音

「だって、先輩は今、私の事、一人の女の子として見てくれてるって事ですもんね？ そう考えると……はい♪ やっぱ嬉しいです♪」

天音

「……んん……あ、あのう、先輩……？ 変な事いうようであれですけど……私、先輩の乳首触ってみたいです……」

天音

「はい、シャツ越しなんかじゃなくって、直接……直で触りたいんです……」

天音

「男の人の乳首なんて今まで触る機会なくって、そのう……自分のしか触ったことないので……好奇心というか、気になるというか……」

天音

「や、やっぱり、ただの後輩に触られるのは嫌ですか？ ……私に触られるのは……嫌、ですか？」

---

---

天音

「ああ♪ は、はい♪ ありがとうございます…  
…！ えへへ…男の人の…先輩の乳首触れる  
んだ…私で興奮してくれた勃起乳首…♪」

天音

「って、え？ 先輩も触りたい…ですか？ へ？  
え？ 先輩が先輩の乳首を？ そ、それってど  
ういう…」

天音

「あ、違う、って…ふえ？ も、もしかして…  
私？」

天音

「私の乳首を触りたい…って…ふえええええ  
えええ…！？」

天音

「い、いや！ せ、先輩！ ま、待ってください！  
それはダメです！ 流石にやり過ぎです！」

天音

「あ、いや、確かに私だけが先輩の乳首を好きにで  
きるというのも、不公平ではありますけど…  
だ、だからってそんな…！」

天音

「あうう…あうあうう…そ、そうですよね…  
…私が先輩の乳首に興味があるように、先輩も私  
の乳首、興味あるんですよね…」

天音

「………わ、わかりました。先に触りたいって  
言ったのは私ですし……ち、ちよっとだけ……本  
当にちよっとだけなら……い、いいですよ？」

---



---

天音 「こんな事……先輩にしか許さないんですから……  
誰にも言っちゃダメですよ？ 約束ですからね……  
…?」

天音 「はい……そ、それじゃあ乳首触りっこする為に、  
シャツ……脱ぎましょっか……」

天音 「あ、でも脱いでるのを見られるのは恥ずかしいの  
で、脱ぎ終わるまでちよっとそっち向いててくだ  
さい……ほら、早く……!」

天音 「じゃ、じゃあ……ぬ、脱ぎますね……」

天音 「ん……しょ……っと……んん……わ……雨のせいで  
シャツ、肌にくっついて……んん、ちよっと脱  
ぎ辛い……ん、んん……んん……はふう……」

天音 「あうう……こ、これえ……外でおっぱい丸出しに  
なってえ……ううう……痴女みたいな恰好し  
ちやってるよお……」

天音 「はあ、はあ……せ、先輩？ そのう……お待ちせ  
しました。シャツ脱ぎ終わりましたので、こっち  
向いてください……」

天音 「あ、先輩の胸……乳首見えて……って……私の乳  
首も、先輩に見られちゃってるんですよね……」

---

---

天音 「はううう……あううう、見られたあ……初めて男  
の人におっぱい見られたあ……恥ずかしい……  
うう、ううう……」

天音 「あ、ちょ、ちよっと、み、見ないでください……  
いや、おっぱいは別に、もう今更なのでいいんで  
すけど……顔は、見ないでください……」

天音 「だ、だって……きつと誰にも見せられないような  
真っ赤で恥ずかしい顔になっちゃってますからあ  
……ううう……」

天音 「や、やあ！ ちよっと先輩！ 覗き込むの禁止で  
す！ ちよっと、や、やめてください……」

天音 「むう……こうなったらあ……えいっ！」

天音 「はあ、はあ……え、えへへ……どうですか？ こ  
れなら私の顔、見えませんよね？ えへへ♪ 我  
ながら名案でした」

天音 「……ん、ただ……この体勢だと、そのう……乳首  
同士が擦れてムズムズしちゃいますけど……」

天音 「ん、あ……やん……！ ちょ、ちよっとお、先輩  
……やあ、そんな乳首こすりつけちゃ……や、あ  
んっ……！」

天音 「はあ、はあ……はふう……んもう、先輩？ おと  
なしくしなきゃ……めっ！ ですよ？」

---

---

天音

「はい、いい子いい子です♪ ふふ……何だか私がお姉ちゃんになったみたいですわね♪」

天音

「って、勢いに任せて凄い事になっちゃってますけど……せっかくですし、このまま乳首触りっこしてあったまりましょうね？ 先輩♪」

	トラック03
天音	「はあ、はあゝ……ん、せ、先輩……これ、凄いです……こんな隙間なく密着して……おっぱい押し付けちゃう体勢……」
天音	「私と先輩のドキドキが重なって……ううう……これ……ダメです……恥ずかしいです……」
天音	「でも、先輩の乳首も触ってみたいですから……このまま……このまま抱きしめあいながら、乳首コリコリしちゃいますね……？」
天音	「ふう、ふうう……んっ……じゃあ、まずは乳首の周り……乳輪をなぞるみたいに……さわさわ……さわさわ……ど、どうですか？」
天音	「あ、乳首ピクピクして……えへへ、男の人も……やっぱり……ん、感じるものなんですわね」
天音	「さわさわ……さわさわ……わあ……凄い……先輩の乳輪なぞってるだけなのに、どんどん乳首勃起してきて……」
天音	「……先輩……私の指で感じてくれるんですね……嬉しい……♪ ならもっと沢山触ってあげます♪ それ♪ さわさわ……さわさわ……」
天音	「乳輪触りながらあ……ふうう……♪ ふっ、ふっ、ふうう……♪」



天音

「ちよっ！？ いきなり、ち、乳首い、ああっ、グリッてしちゃ……あ、あ、あ、ああんっ……だ、ダメえ……♪ そんな激しくコリコリしちゃめえなのお……」

天音

「はあ、はあ……も、もしかして、さっきからかった事への仕返しですか……？ ううう……そんな、あん……！ ちよっと先輩の乳首虐めただけじゃないですかあ……」

天音

「ん、はにやあっ……！ ま、待って、ください、ん、あんっ……乳首……んはあっ、グリグリ……つぶしちゃ……ん、やあ……あ、あ……ああああっ……！」

天音

「ふあんっ、あんっ、おっぱいも、そ、そんなに強く、揉んだら……んあ、あ、あ、あ、ああ……！ 痕、残っちゃ……や、は、ひやあああん……！」

天音

「ふああ……！ はあ、はあ、はあ、はあ……んん……はあ、はふう……ん、はっ……ああ、ん、ひ、はああっ、はあっ……変な声が、あ、んああ……！」

天音

「はあんっ、ふ、んひああっ、ん、ああっ……あ、くああ、う、ひあっ……はあっ、はあっ、はあああっ……！！」

---

天音 「はあ、はふう……んん、先輩がその気ならあ……  
はあ、はあ……私にだって、考えがあるんですか  
らね……?」

天音 「んゝちゅ……ちゅ……れろ……れろれろ……  
ん、ちゅううゝゝ……ぷはあ……はあ、はあ……  
……ど、どうですか? 先輩……」

天音 「これ、耳舐めっていうみたいで……男の人は好き  
なんですよね? 雑誌にそう書いてありました……  
……」

天音 「初めて人の耳の中を舐めましたけど……ん、ちゅ  
……れろ……れろれろ……れろれろれろれろ……  
ん、ちゅ……」

天音 「ふふ♪ 先輩? おっぱいを揉む手が止まってま  
すよ? そんな余裕もないくらい感じてくれてる  
んですね……」

天音 「えへへ、これで形勢逆転です……♪ このまま乳  
首弄りながら耳舐め……してあげますね」

天音 「んゝ……ちゅ♪ ちゅ、ちゅ……れろれろ……ん  
ちゅ……ちゅぷぷ……ん、れろれろれろれろお……  
……ちゅ、んゝちゅ♪」

天音 「はむ♪ れろれろ……れろれろれろれろ……  
ちゅ、ちゅぷぷ……んん、れろれろお……れろれ  
ろれろれろお……」

---

---

天音

「ん、はあゝゝ……♪ 先輩……ん、ちゅ……乳首  
もお……コリコリ、コリコリ……ちゅ……れろ  
れろ……んゝちゅ♪」

天音

「はあ、はあ……♪ 後輩に耳舐めされながら乳首  
虐められてえ……んゝちゅ♪ れろ、ちゅ……  
れろれろお……こんなに乳首おつきくしちゃうな  
んてえ……」

天音

「ふうううゝゝゝ……♪ 先輩は思ってたより  
も変態さんですね……ちゅ、ちゅ……れろ、れる  
れるれるれる……ちゅぶ……ちゅ、ちゅ♪」

天音

「はあ、はあ……♪ 先輩……もつと奥まで……お  
耳の中……ぺろぺろしてあげます……」

天音

「はあゝ……む♪ じゅる……じゅるる……ん、  
ちゅ……れろ、れろれろお……れりゅ、んちゅ……  
……じゅるじゅる……ん、じゅるるるうう……  
……」

天音

「んん、しえんふあゝい……じゅる♪ んちゅ……  
れろれろれろれろお……んちゅ、ちゅ、ぢゅる……  
……ぢゅるる……れゝろれろれろお……」

天音

「じゅるる……れゝゝ……れろれろ……んちゅ……  
ちゅ……じゅる……んんゝ……れろ……れろれろ  
れろれろ……んぷっ……じゅるる……はむ……  
ん♪ れろれろ……じゅるる……れろれろれろれ  
ろゝ……」

---



---

天音

「んむう……はあ……はむう……れろれろお♪  
じゆる♪ んん♪ 乳首もお♪ はあ……♪ コ  
リコリい……んちゅ、れろれろお……きゅつ  
きゅう……♪」

天音

「はあ、もっとお……もっと喘いでくれていいです  
からね？ ん……ちゅ♪ ちゅ、ちゅ……れろ、  
れろれろお……じゆるる、んん、ちゅ」

天音

「ん、ふうふうふう……ふっ、ふっ  
……ふうふう……えへ♪  
もっと可愛い先輩を……私に見せてください…  
…♪」

天音

「れ……れろれろれろお……れろれろれろ  
れろお……じゆるる、んふう……しえんぱいのお  
耳い……私の涎塗れで……んちゅ、じゆる、じゅ  
るじゆるじゆるじゆるう……」

天音

「ん……ちゅ♪ じゆるる♪ じゆる……ん  
ぷっ！ れろ……れろれろ……んちゅ♪ じゆる  
……じゆるじゆる……ん、ちゅぷ……ちゅぷ  
ぷっ！ じゆる、じゆるる……じゅりゅりゅりゅ  
……」

---

天音

「んん……♪ はふう……ふう、ふう……んちゅ、ちゅ、ちゅ♪ れろお……れろれろれろお……ちゅ、んちゅ♪ ちゅ……れろ、じゅる……じゅるじゅるうう……ん、ぷはあ！ はあ、はあ、はあ、はあ……」

天音

「ん、えへへ……ちよつと激しくしすぎちゃいました……先輩……お耳、ご馳走様でした」

天音

「でも……片側だけ舐めると不公平ですからあ……」

天音

「こつちのお耳も、いっぱいペロペロしてあげます……♪」

天音

「はあ……む♪ じゅる♪ じゅりゅりゅ……んちゅ……れろ、れろれろ……れ……れろれろれろれろお……んちゅ、ちゅ……ちゅ♪」

天音

「れろれろ……んちゅ♪ ちゅ、ちゅ……れろ、れろれろ……んちゅ……ちゅう……ちゅ、ちゅ♪」

天音

「ん、ふうう……♪ ふっ、ふっ、ふうう……♪」

天音

「はあむ♪ ちゅ、んちゅ……れろ、れろれろ……んちゅ……ちゅぷ、ちゅ……ちゅ、ん……ちゅ♪ ちゅ、ちゅ♪」

---

天音

「先輩……んちゅ、ちゅ……れろ、れろれろ……  
はぁ……しえんぱい……ちゅ……れろれろれ  
ろれろ……」

天音

「んむう……ん、ん……ちゅ、れるれる……ちゅ  
ぷ、んん……先輩い……はぷっ……ちゅ、れろれ  
ろれろれろお……ちゅ、ちゅ♪」

天音

「はぁ、はぁ……ちゅ、ちゅ♪ れろれろれろれ  
ろ……ちゅぷ、んちゅ……れろ、れろれろ……  
ちゅ、ちゅ♪」

天音

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……れろれろ……ん、  
ちゅ……ん、んん……ちゅ、ちゅぷぷ……れろぷ  
ちゅ……ちゅ、ん……ちゅ♪」

天音

「はぁ……あったかい……裸でおっぱい押し付けて  
……乳首こすりつけての耳舐めキス……んちゅ……  
ちゅ、ちゅ♪」

天音

「雨に濡れて冷えた体がどんどん火照ってきて……  
はむ……ちゅ、れろれろ……ちゅぷ♪ んん……  
ちゅ、れりゆれりゆれりゆれりゆ……」

天音

「んふう……はむう、ちゅぷっ……じゅる、じゅる  
るるるう……じゅる、んふう、ちゅ、じゅる  
る……んちゅ、ちゅ、ちゅ♪」

---

---

天音 「はあ、はあ……先輩？ 手、ずっと止まったままですけど、いいんですか？ 私のおっぱい……もう触らなくていいんですか？」

天音 「んちゅ……ちゅ、ちゅ……はあ……あ、いえ……別に私が触って欲しいとかじゃなくって……決してそんな事ではなくって……」

天音 「……ただ、その……こんな、お外でおっぱいまで出したのに……少し揉まれただけで終わりじゃ、頑張った意味が薄いというか、何というか……」

天音 「ん……ちゅ……せっかくこんな恥ずかしい思いしておっぱい見せてあげたんですから、もっと私の事……私のおっぱいを使って楽しんでください……先輩……」

天音 「はむ……ちゅ、ちゅ……れろ、れろれろお……じゆる、じゆるるるる……ん、れろれろお……ちゅ……ちゅ……れろ、んっ！ ん、んん！？」

天音 「ぷはあ！ あ、きやんっ！ や、せ、先輩……！だからって、そんな急に……あ、ひやんっ！また胸……おっぱい揉んじゃ……ひやあんっ！？」

天音 「はっ、はあ、はあ、はあ……♪ ん、先輩の手……あったかくって、おっぱいに沈み込んできて……んあ、あ、ああ……♪」

---

---

天音

「はふう……ん、その手つき、いいです……先輩に求められてるのが伝わって……おっぱい愛されてるのが伝わってえ……」

天音

「ん……ちゅ♪ れろれろ……ちゅ、ん……ちゅ♪ れろれろお……ちゅぶ、ん、ちゅ……れろ、れろれろれろお……」

天音

「はあ、はあ……♪ ん、いいですよ？ 遠慮なんてせず……私も先輩の胸……乳首弄りますから……先輩も、私のおっぱい……乳首……弄って、可愛がってください……」

天音

「始めは刺激が強すぎてビックリしちゃいましたけど……先輩に触られるの……気持ちいいですから……はい、いっぱい私の乳首……可愛がって欲しいです……♪」

天音

「ん、ああん♪ やあ……ん、ちゅ……れろれろ……ちゅ、ん、はふう……ん♪ 乳首コリコリ来ましたあ……先輩の大きな指が、んん！ 私の乳首挟んできてえ……！」

天音

「はあ、はあ……ん、ちゅ……れろ、ちゅ……れろ……れろれろれろれろお……ん、じゅる、じゅるじゅる……じゅるるう……」

天音

「んはあ……せんぱい……んちゅ、ちゅ、ちゅ……れろれろ……れろれろれろお……じゅる、じゅるるるう……んちゅ♪」

---

---

天音

「はあ、はあ……んちゅ、ちゅ……もっろお……んちゅ、ちゅ……ちゅ……先輩の手の温もり感じさせてえ……」

天音

「んちゅ、れろお……れろれろれろ……はぶ、んちゅ♪ ちゅ、れろれろ……んぷっ……じゅる……じゅりゅりゅりゅ……ん、ちゅ♪ れろ……れろれろれろろ……♪」

天音

「先輩に揉まれるの、好きれすう……先輩に触られる度に、ん、ちゅ……全身がポカポカして、あつたかくなつて、安心するんです……」

天音

「これ、好き……先輩におっぱい、乳首こねくり回されるの……好きです……」

天音

「ん、ちゅ……れろ、れろれろれろ……ちゅぷ、ん、ちゅ……ちゅ、んちゅ……ちゅ、れろれろ……れろれろれろ……」

天音

「はあ、ん、んん……！ あ、そこ、いいです……乳首の先っぽ……母乳の出口擦られるの……あっ！ ん、あうう……い、いいです……気持ちいいですう……」

天音

「ん、ちゅ……れろ、れろれろれろ……れりゅ……じゅぷぷ、ん、ちゅぷ……れろれろれろろお……じゅるる……じゅぷぷ……」

---

---

天音

「ん、ちゅ♪ れろれろ……ちゅ、んん……ぷちゅ  
……じゅるる……れろ、れろれろれろれろ……  
ちゅ、んちゅ……ちゅ、れろ、ちゅ……」

天音

「ちゅぷ、ん、ちゅ……れろ、れろれろれろれろ……  
……じゅるる……じゅぷ、んちゅ……ちゅ、れろ  
……れろ、れろれろれろれろれろれろれろお  
……」

天音

「ん、やつ！ あんっ！ ちよ、ちよっと、先輩……  
……だ、ダメ……それ以上乳首、んん……擦っ  
ちや、んあ……や、ダメ……ほんとにダメですっ  
て……」

天音

「はあ、はあ……ん、はふ……ん、あ、あうう……  
これ、ダメ……濡れちやう……んん、感じすぎ  
て、や……らめ……おパンツ……シミ、出来ちゃ  
いますからあ……」

天音

「あ、あ、あ、ああ……んん、せ、先輩い……」

天音

「はむっ、んちゅ、ちゅ、れろれろ……れろれろれ  
ろれろ……じゅる、じゅるる……ん、んん……  
ん、れろれろ……ちゅ、んちゅ、じゅるる……れ  
ろれろ」

天音

「はふ……ん、ちゅ、先輩、ダメです……もうおっ  
ぱい止めてくらひやいい……ん、あ、ああん……  
……」

---

---

天音

「ほんとに……ん、んん！ も、もうらめ……  
はあ、はあ、んああ、はあ、はあ……ゆ、許して  
……おっぱい、これ以上は許してくらひやい……  
…」

天音

「ん、んああ……！ あ、あ、ああ……やあ、  
しえ、しえんぱい……ん、ちゅ……れろ、れろ  
れろ………」

天音

「ん、んん！ ダメれす……ん、もう、無理……  
で、出ひやうう………！ んふう………！ 先輩に抱  
き着いたままあ……あ、やん………！ お股漏れる  
……漏れひやいましゅうう………！」

天音

「んあ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ……  
……！ ら、らめえ………イ、イきゅ………！ イキま  
しゅ！ 乳首でイっひやう！ イっひやいま  
しゅうう！」

天音

「んん！ んああ！ あ、あ、あ、ああ………！  
イ、イグう！ イグイグイグイグイグイグイ  
グうう………！」

天音

「イっきゅううううううう………！」

天音

「ひやわあああ！ あ、あ、あ、ああ………！  
やつ！ せ、先輩！ 見ないで！ 見ないでくだ  
さい………！」

---



---

天音

「ん、はうう……！　そ、そんな……この年でお漏らし……しかも……先輩のお膝の上でなんて……ん、あうう……あうあうう……」

天音

「や、せ、先輩！　聞かないでください！　お漏らしの音聞かなくてください……ん、やつ、ちよ、ちよっとやめ、ん、はうう……！」

天音

「あああ……あう……あ、あああ……ほんとダメ……ダメですう……ん……！　恥ずかしい……恥ずかしいですう……」

天音

「は、早く治まっつてえ……ああ……お漏らし治まっつてえ……ん、あうう……や、やあ……止まない……お漏らし……おしっこお……んああ……止まないよお……」

天音

「ん、ああ……ちよ、ちよっと先輩……嗅がないでください……私のおしっこ嗅がないでください……」

天音

「ん……あうう……はあ、はあ……お願い……お願いだからあ……閉じてえ……おしっここの穴早く閉じてえ……」

天音

「はあ、はあ……ん、はあ、はあ……はあ……はふうう……」

---

---

天音

「ううう……馬鹿……先輩のバカバカバカバカ……  
……ダメって言ったのに……！ おっぱいでお  
漏らししちゃうって言ったのに……！」

天音

「もう、どうしてくれるんですか？ 私、替えの下  
着なんてもってないですし、先輩もズボン……私  
の……そのう……おしっこでベドベドですし……  
……」

天音

「ふえ？ ぜ、全部脱いじゃう……って、ええええ  
ええええ……？？」

	トラック04
天音	「んっしょ……うう……ん、んん……んむう…… はあ、はあ……うん……しょ……っと……」
天音	「はうう……せ、先輩の前で……スカートと…… パ、パンツ……脱いじゃいました……」
天音	「……ああんもう……頭がクラクラします……なん でこんな恥ずかしいことができているのか、自分 でも不思議です」
天音	「ううう……その……ど、どうですか？ 私の、裸 ……正真正銘、生まれたままの姿……変じゃない ですか？」
天音	「……そ、そうですか。綺麗、ですか……あ、あは は……良かった、のかな？ はああ……恥ずかし くて、体が熱いですよお……」
天音	「あ、えと、その……先輩も……綺麗、ですよ？ 傷一つなくて……がっちりしてて、逞しくて…… お股のそれも……すっごい力チ力チで……」
天音	「こ、これって、あの……あれ、ですよね？ 勃起 ……してるんですよね……」
天音	「わあ……これが、男の人の……勃起してる姿なん だ……」

---

天音 「わっ！ わわっ！？　ぴ、ピクピクしてる……凄  
い……触ってもないのに動かせるんですね……不  
思議です……」

天音 「って、あ、あれ？　でも何だか想像してたのと  
ちよっと違う……」

天音 「保健の授業だと、その……亀頭？　っていう部分  
があるって聞いたことあるんですけど……全部皮  
に包まれてて……」

天音 「あ、もしかして、この長く伸びた皮の中に隠れ  
ちゃってるとか……ですか？」

天音 「な、なるほど……確か包茎っていう……あ、  
ああ！　ご、ごめんなさい先輩！　ちよっと無神  
経過しました！」

天音 「そ、そうですね……包茎がコンプレックスの人  
もいるって聞いたことがありますし……ほ、本当に  
ごめんなさい……！」

天音 「って、あれ？　でも……皮の先からちよっと亀頭  
が見えて……わ、わわ！　どんどん大きくなって  
……」

天音 「も、もしかして……このままもともうっと大き  
くなれば、先輩のおっきな力メさん、出てこれた  
りしますか？」

---

---

天音 「あ、そうなんですネ……じゃ、じゃあ……先輩？  
何か私にして欲しい事、ありますか？」

天音 「先輩の勃起をお手伝いできるなら、私、何でもしますから……はい、大丈夫です……言ってく下さい……先輩の願望……先輩が私としたい事……」

天音 「あ……先輩……か、顔……近いです、よ？」

天音 「そんなに、顔……近付いたら……唇が……当たっちゃいそうです……」

天音 「はあ、はあ、はあ、はあ……あ、当てたい？唇を、ですか？……でも、それは……あ、当たったら……」

天音 「い、いえ、嫌ってわけじゃ、なくて……先輩のしたい事なら何でもするって、言いましたし……」

天音 「で、でも……分かってますか？ 私達、まだ、その……全然、そ、そういう事する関係じゃなくって……」

天音 「恋人じゃ、ない、から……あ、う、恋人じゃない、けど……でも……」

天音 「せん、ぱい……んっ……ちゅ……ん、ちゅぶ、ううっ……ふっ……ん、ちゅ……ちゅ、ん……ちゅ……」

---

---

天音 「はあ、はあ………ああ………しちやつ、た…  
…先輩と、キス……」

天音 「私……キスって……その、初めてで………  
えっ？ 先輩も、なんですか？ 先輩も……フ  
アーストキス、だったんですか？」

天音 「そんな、大事な、一生に一度のキス……わ、私で  
良かったんですか？ ……そ、そうですか……私  
が、いいんだ……」

天音 「せ、先輩……！ あ、あの……もう一度、いいで  
すか……？ その、キス……ちゅ、って……先輩  
とキス、したいです……」

天音 「私も嫌じゃなかったですし……むしろもったした  
いって思ってますから……」

天音 「今度はきちんと……先輩とキス、自分の意志で、  
したいです……」

天音 「あ、先輩……ん、ちゅ……ちゅ、ちゅ、ちゅ、  
ちゅ……♪」

天音 「んふ、はっ……はぷっ！ ん、んん！ ちゅ……  
んちゅ、れろ……ちゅ、ちゅ……んゝちゅ♪  
ちゅ、ちゅ♪」

天音 「んああ……♪ はあ、はふう……うう……キスう  
……先輩との、エッチなキスう……♪」

---

---

天音 「はあ、はあ……ふう、はあ……ああ……心臓、ド  
キドキして……んんっ、破裂しそう、です」

天音 「はあっ……はあっ……キス……もう一度、キス、  
してください……」

天音 「今度はキスしながら……おっぱい、いっぱい  
揉んでほしいです……先輩の唇と手で、私の事  
いっぱい気持ちよくして欲しいんです……」

天音 「先輩……ちゅ♪ んふっ、う……むうう、ん、  
ちゅっ……んん、ふ、う、ちゅっ………ん  
んうっ……！ ちゅ、ちゅ……ちゅ♪」

天音 「ん、はあ、はあ……はふう……えへへ♪ キ  
スって……すっごく気持ちいい、ですね……」

天音 「きつと先輩とだから……こんなに温かくて……素  
敵なキスなんだと思います……先輩……もつとし  
てください……したいです……して欲しいです……  
…♪」

天音 「ん……ちゅ♪ ちゅ……ちゅぷっ……ちゅ……ん  
……ちゅ♪ ちゅ、ちゅ……ちゅ♪」

天音 「ん……あ、やあん……♪ おっぱいも、むう、  
ん、いっぱい、んあ……♪ モミモミされて……  
気持ち良くて……頭が、飛んじやいそうです♪」

---

天音

「んっ……ちゅぷっ、う……ちゅ、はふう、あ……先輩、舌……ん、れろっ……れろれろっ……ん、これえ……エッチな、キスう」

天音

「あ、いえ、嫌じゃないです……もっと、しましう……んちゅ、れろっ、れろれろおっっ、ちゅ、ぱっ……ん、あっ……！」

天音

「ちゅぱっ、ちゅぱちゅぱっ、ん、ふあっ、ん……れろっ、れろれろっ、れろれろれろ……んちゅ、ちゅっ、ぷ……れろおっっ、ん、ふあ、あ、んっ……れろっ、れろれろっ、ちゅ、じゅるるるうっっ！」

天音

「ぷはあっ……はあ、はあ……あ、ごめんなさい」

天音

「あうう……そ、その……今……先輩の、お股のところに、手が当たっちゃって……はうう……これ、すっごく硬いんですね」

天音

「心なしかさつきより大きくなってる気がします……キスで興奮してくれてるんですね……嬉しい……♪」

天音

「ならもっと興奮して……先輩の包茎が綺麗に剥けるまで、お互いに乳首をいじりながら……ん、ちゅっ、キスして……エッチな事しましょう」

天音

「はむ、ちゅっ、ちゅぷ♪ む、んんう、ちゅぱっ、んふっ……ん、れろっ、れろおっっ」



---

天音 「しえんぱい……舌、れゝって出してください……  
ほら……れゝゝ……」

天音 「あむう……じゆる、じゆるるるるうゝゝ……ん  
ちゅ♪ じゆる、じゆるる……ちゅぶ、れろれろ  
れろれろお……じゆるる、んちゅぶぶ」

天音 「はむ、ちゅ♪ じゆるる……じゆるるるう……  
じゅぶ、ん、ちゅ……れゝゝろれろれろ……れろ  
れろ……ちゅ、んゝ……ちゅ、ちゅぶ、ん、  
ちゅ」

天音 「ぶはあ……はあ、はあ……先輩……ちゅ……ん  
ちゅ……ちゅ……れろ……れろれろれろ……  
ちゅ、ん……ちゅ♪」

天音 「はあ、先輩の舌あ……よだれ塗れで……ん、ちゅ  
……れろれろ……ちゅ、ちゅ……はふう……ん  
……ふふ、エッチな涎の橋がかっちやいました  
ね……」

天音 「ん……じゆるる……ん、ちゅ……はあ……なんだ  
ろう……そんなはずなのに……甘く感じます……  
……先輩の唾液……とっても美味しい……」

天音 「もっと……もっとください……先輩のエッチな唾  
液……口移しで……私に流し込んでください」

---

---

天音

「んむ……ちゅ、れる……じゅる……じゅるるう……ん、んちゅう……れろれろ……ちゅ、ちゅ……れろれろれろお……」

天音

「んふう……ちゅぶ、れろ……じゅる……じゅるる……んぷう……ちゅ、れろ、れろれろ……ちゅ、ちゅ、ちゅ……♪」

天音

「ん、ん……ぷはあ、はあ、はあ……んあ……喉……ん、先輩の涎が引かって……」

天音

「んふう……ぐく……ぐく……ぐく……ぐく……ぷはあ……！ はあ、はあ……はあ……ん、ぐく……」

天音

「美味しすぎて、全部ごつくんしちゃいました……はふう……何だか先輩が私の中で一つになったみたいで……嬉しいです……♪」

天音

「って、あ……♪ 先輩……いつの間にかそれ……包茎、剥けてたんですね……良かった……えへ、おめでとうございます」

天音

「ふああ……すごい……先っぽって、そんなに赤く膨れるんですね……生で見たのは初めてだから……わあ……凄いです……」

天音

「剥けた皮が境目で段差になって……って、あれ？ これ、何か白いのがくっついてて……何だろう？ ゴミかな？」

---

---

天音 「先輩、すみません……もっと近くで見せてください……」

天音 「うわあ……皮の間にいっぱい白いのがたまつて……色も濃くつて……匂いも……スン、スンスン……すうう……んっ!? ゲホっ! けほっ! けほっ……!」

天音 「な、何ですかこの匂い……すっごく酸っぱくて、濃くつて……臭い匂い……ん、ん……でも何だか、これ、嗅いでるだけでお股……うう……ムズムズしちゃいます……」

天音 「もう一度お……スン……スンスン……すうう……はあ……あうう……やっぱりダメです……この匂い、すっごく臭いのにも……でもクセになります……♪」

天音 「あ、ああ……これ好き……この匂い好き……大好きです……ああ、スン……スンスン……すうう……はあ……」

天音 「あうう……や、ダメ……匂いだけで、ん……イ、イク……これ、また来ちゃう……あ、ああ……またお漏らし来ちゃう……!」

天音 「んん! ん、んん! やっ……だ、ダメ……! またイクなんて……!」

---

---

天音

「う、ううう……！　でもこんなエッチな匂い嗅い  
じゃ……あうう……いつひやう……！　スン、ス  
ンスン……すうう……お、おお♪　匂いだ  
けでいつひやううう……！」

天音

「んあああ……！　あ、あ、あ、ああ……！　イ  
グっ……！　イ、イグイグイグ……！　ん、  
んん……！　イ、っぐううう……！」

天音

「ん、んあああああ……！　あ、あああ……！  
やあ……そんなあ……！　ま、またお漏らし……  
……！　う、ううう！　やあ、いやいやいやいやあ  
……！」

天音

「んはうう……！　ダメえ！　止まってえ……！  
お漏らしい……！　はうう……！　あ、あ、あ、  
あああ……！」

天音

「はあ、はあ……はひい……！　ん、んおおお……  
……！　お、おおお……やあ……やらあ……  
ん、あうう……！」

天音

「はあ、はあ、はあ、はあ……ん、んああ……  
はあ、はふうう……ん、んみゆうう……  
おおお……お、おおお……！」

天音

「ん、はあ、はあ……はああ……んああ……は  
ひゆうう……やあ……お股またベトベトになっ  
てえ……うう、気持ち悪いですう……！」

---

---

天音 「それに、子宮の奥……赤ちゃんのお部屋がムズムズしてえ……はあ、はあ、はあ、はあ……」

天音 「あ、先輩も、ここ……ムズムズするんですか？私の鼻息が当たって……こそばゆいんですね？」

天音 「なら私と一緒にですね……私も同じ……お股がムズムズして、奥からトプトプエッチなお漏らししちゃって……」

天音 「ん……じいいい……はあ、はあ……先輩……これ……こんな臭いまま放置してたら……きつとよくないですよね……」

天音 「包茎の中でいっぱい汚れがたまっちゃって……このままだともしかしたら病気になっちゃうかもですし……」

天音 「……うん……それなら……ん……ちゅ……♪ちゅ……ちゅ♪」

天音 「え、えへへ……先輩のここ……亀頭の先っぽ……キス……しちゃいました……♪」

天音 「はい……そうです……このまま私が……お口で……先輩の汚れた包茎を綺麗にしてあげます……♪」

---

---

天音

「んゝゝ……ちゅ♪　ちゅ……ちゅ、ちゅ♪　ん、  
はふうゝ……♪　これ……凄い……ああ……匂い  
だけでむせ返りそうなのに……唇でキスしちゃっ  
て……」

天音

「んゝ……ちゅ♪　ちゅ……ちゅ♪　……あ、こっ  
ちにも汚れが……んちゅ♪　ちゅ……ちゅ、ちゅ  
……ちゅ♪」

天音

「わ……唇に白いのが付いて……ん、あむ……ん、  
んん……ごくっ……ごくっ……んん……！　け  
ほっ！　けほっ、けほっ……！」

天音

「う、うえええ……これ……お世辞にも美味しくは  
ないですね……臭い匂いは嫌いじゃなかったです  
けど……味は苦くて……結構ゲテモノ感あります  
……」

天音

「で、でも……きちんとお掃除してあげるっていい  
ましたから……責任もって……お口でお掃除して  
あげます……」

天音

「んむ……ちゅ♪　ちゅ……ちゅ……ちゅぷっ……  
ちゅ……んゝゝ……ちゅ♪　ん、ちゅ……ちゅ、  
ちゅ……♪」

天音

「んん……これ……皮に挟まってこびり付いて……  
……うう……唇だけじゃ取れないですね……ん……  
なら……今度はお口で啞えて……舌で舐めとるよ  
うに……」

---

天音

「ん……れ……じゅるっ！ んちゅ……じゅる……じゅりゅりゅりゅりゅ……んちゅ……ちゅぷっ！ ちゅ……ん……ちゅじゅる……じゅるる……ん……ちゅ♪ ちゅ♪」

天音

「あむう……！ じゅるる♪ じゅるるる……！ ちゅぷっ！ ちゅぷう……！ ん、んぷうっ！ うっ！ ん、んぶっ！ じゅる……！ じゅるる……！ じゅりゅりゅ……！ じゅぶぶぶう……！ んぶっ！ ぷぶっ！ んちゅ、ん……ぷはあっ！ はあ、はあ……」

天音

「んえ……あうう……！ 先輩い……お口に入れた途端またおつきくしてえ……う……けほっ！ けほ、けほっ……はうう……顎外れちゃうかと思っちゃいましたよお……」

天音

「ん、でも……またおつきくしてくれたって事は、私のお口掃除……氣に入ってくれたって事ですよね……？」

天音

「え、えへへ……そうですか……気持ちよくなってくれてるんですね……♪ はうう……ああ……なんだろう……♪ こんなに臭くて美味しくないのに……先輩が喜んでくれてるって思うと……もっともっとお口ご奉仕したくて仕方ないです……♪」

---

天音

「はあ、はあ……先輩……もっと腰突き出してください……喉の奥まで……私のお口全部でしっかり舐めとって綺麗にしてあげますから……」

天音

「はい……私の喉奥に汚れを擦りつけるつもりで……思いっきり突き入れてください……!」

天音

「ん……あ……む……ん、ん……?  
んじゅっ! じゅぶっ! じゅぶぶぶ  
……! んぶうっ! お、おぶっ……! ん  
ぶっ! じゅぶじゅぶじゅぶじゅぶ! じゅぶ  
じゅぶじゅぶじゅぶ……!」

天音

「ん、んぶう……! んぶぶう……! じゅぶう……!  
……! んぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶう……!  
……! んぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶう……  
……!」

天音

「じゅぶっ! れりゅ……! ん、じゅる……!  
じゅるるるるるるるるる……! ん!  
じゅるるっ! じゅぶっ! ぶぶっ! ぶっ!  
じゅる……! じゅるる……! ん! ん  
むう……!」

---





---

天音

「ああ……凄い……私の涎と先輩の熱が混じって……  
……とっても蒸れてて……はあ、はあ……先輩……  
……うう……せんぱいいい……」

天音

「こ、こんな事いうとはしたない子だって思われる  
かもですけど……私い……先輩のを舐めてたら……  
……ここ……お股がすっごく熱くなって……ムズム  
ズして……」

天音

「うう……はあ、はあ……だ、ダメれす……ううう  
……こんなの我慢できませんよ……」

天音

「先輩……お互い、もうこのままじゃおさまりも着  
きそうにありませんから……」

天音

「……先輩が、私と同じなら……私と同じ気持  
ちなら……」

天音

「……もっとエッチな事……私と、セックス……  
……してみませんか？」

---

	トラック05
天音	「えっと……先輩はベンチに座っててください……私が上になりますので……」
天音	「あ、あはは……なんだかドキドキしちゃいます……まさかこんな事になるなんて……」
天音	「いえ、別に後悔してるとか、そういうのじゃないんです。ただ……まさか今日、こうやって先輩とするとは思ってなかったの……」
天音	「でも、勘違いしないでくださいね？ 誰とでもする訳じゃないんですから……」
天音	「はい、先輩だから……先輩じゃなきゃ、こんな事絶対しませんし……先輩以外の人には触らせませんから……」
天音	「だから……どうか、私の初めて……貰って下さい……私も、先輩の初めて……童貞……貰っちゃいますから……」
天音	「ん、あ、あ……先っぽ触れて……はい……このまま、入れますね？」
天音	「んんんっ……こうやって……私の中に……先輩の先っぽを入れれば……」
天音	「く、ふっ、や、あん……！ な、なかなか上手く、ん……入りませんね……」

---

天音 「ん、んんうつ、ふっ……ふっ、うつ……ああ、体を、上下に揺すったら……ち、ちよつとずつ……入ってきますね」

天音 「こういう入れ方で……いいのかどうか……わかりませんけど……んんっ……！」

天音 「はあ、はあ……先輩は、どうですか？ 痛かったりは……しないみたいですね……ふふ、だって、気持ちよさそうな顔してますもん……♪」

天音 「ならこのまま……んっ、んっ、んっ……ちよつとずつ……お腹の中、入れていきます……♪」

天音 「私の子宮から零れたお汁を……ん、しょ……ん、しょ……ローションがわりにいっぱいまぶして……ペタペタ、ペタペタ……」

天音 「んんん、うつ……あと、もうちよつとで……ふ、ああっ……全部入りそうです……」

天音 「あ、ふあっ……！ あ、ああ……き、来ます……！ おっきいの来る……来ちゃうう……！」

天音 「んああ……！ あ、あ、あ、あ、あ、あ、ああ……！ せ、先輩い！ 先輩先輩い……！ ん、んんん……！」

---

---

天音

「んっ……ひゃああああっ！　あ、ああ……  
お、おおお……♪　おおお……♪　んはあ、  
はあ、はあ……はふう……ん、ひゃああ……♪」

天音

「はあ、はあ……ああ……♪　ん、あうう……♪  
先輩い……♪　は、入りました……♪　ここ……  
お腹の奥……届いてます……ポコってお腹膨らん  
でますう……♪　はあ、はあ……♪」

天音

「んあ、なんだか、んん、大きさも、ぴったりで……  
……はうう……みちみちうって密着してる感じが、  
はつきりわかりますう……」

天音

「はあ、はあ……先輩……私達、一つになってるん  
ですね……お腹の中から先輩の熱……しっかり感  
じ取れますし……夢、じゃないんですよね……」

天音

「ふああ……♪　男女で繋がるのって、こんな感じ  
なんだ……」

天音

「想像より痛くなくて……ああ……先輩と一つに  
なれて、嬉しい気持ちでいっぱいです……」

天音

「はあ、はあ……先輩、このまま……繋がったまま  
ぎゅってしてくれませんか？　はい、ぎゅって……  
……恋人がするみたいに力強く、裸同士でぎゅって  
して欲しいんです……」

---

---

天音

「ん、んん……あうう……はああ……先輩……あつたかい……お腹の中からも、体の外からも先輩の温もりが感じられて……全身先輩に包まれて……ああ……これえ♪ 幸せすぎますう……♪」

天音

「えへへ、先輩……分かりますか？ 今、先輩の先っぽが届いてるとこ……そこ、きっと私の赤ちゃんのお部屋ですよ？」

天音

「はい、そうです……私の一番大切な場所……将来を誓い合った人との愛が宿る、赤ちゃんのお部屋……先輩だけしか触れない、エッチなお部屋……」

天音

「いいですよ？ 先輩だけが触れる赤ちゃんのお部屋……いっぱい突いて……私の事……可愛がってください……♪」

天音

「ん、あ、あんっ！ あ、あ、あ、あ、あ、あ、ああ……♪ ん、はふうう、あっ、ああ……♪ すこ、い……うあっ……あ、ああっ、下から、んっ、振動、子宮に響いて……」

天音

「こ、こんな、んああっ……体の、中に……ん、はあっ、伝わって、くる、んん……！ ものなんだ、あ、あ、あああっ……！」

---

---

天音

「す、すごい……！ あ、ああ♪ 抱き合いながらのセックスう……♪ 肌密着してえ……ん、はふう……全身が先輩と一つに溶け合ってるみたい……♪」

天音

「んはっ、ああ、すごい、く、ふあっ、何度も、突き上がって、くる、う、ああん……！ はあ、はあ……あ、ああ……こ、こんなの、初めて……！」

天音

「セックス、って、こんな、んん！ 気持ちいいんだあ……あ、ああっ……！」

天音

「ふああっ、んひゃあ！ あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、ああ♪ これ、好きい♪ 先輩とのセックス……大好きですう……♪」

天音

「ん、んん！ は、はふう……ん、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん……！」

天音

「んや、ん、んうっ……はあ、はあ……あうう……こ、これえ……ダメえ……ヒダヒダかき分けられてえ……や、あん！ 奥う！ コンコン来るう……赤ちゃんのお部屋コンコン来てるう……！」

---

天音

「こ、これえ……んあ、あああつ、この、感覚う、子宮突かれる感覚気持ち、良く……ってえ……あ、あ、あうう……！こ、声、あ、出ちゃう……！外なのに……んん！声出ちゃいますう！」

天音

「んああ♪ あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、ああ！んああ♪ あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、ああ……！あうう……！ん、んん！」

天音

「はあ、はあ……！ やっ……んん♪ せ、先輩……！私は、ん、ああん♪ だ、大丈夫ですから……もつと……もつと強く……激しくエッチしてください……」

天音

「だって……先輩……本当はもつと……んん♪ いっぱい動きたいんですよね……？ 私といっぱいセックスしたいんですよね……？」

天音

「ん、あ、あん♪ はあ、はあ……はいい……分かりますよお……だって……私も……もつとお……んん♪先輩に愛されたいんですもん……壊れちゃうくらい……赤ちゃん孕んじやうくらい求められたいんですもん……！」

天音

「ん、んん♪ はあ、あ、あうう……！ん、やっ、あ、ああ……♪んん、やあん……そんな……私は、エッチじゃないですう……」



「はあ、はあ……でも、もし私がエツチな子になっちゃったんなら……それはきつと、先輩のせいなんですからあ……♪」

「先輩が、かつこよくて……素敵なのが悪いんですからあ……♪　ん、んん♪　こんな素敵な先輩に求められたら……あうう……！　私もエツチになっちゃいますよお……♪」

「ん、んん……♪　だ、だからあ……♪　ん、やあ  
ん♪　はあ、はあ……私をエッチな子にした責任  
……とってください……!」

「私の事……いっぱいいっぱい……大好きって……  
沢山パンパンして愛してください……!」

「んああ……！ あっ！ んひやああ！ あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、ああ！ や、せ、先輩！ ふあ、う、んあっ……そ、そんな、いきなりそんな、思いつ切り中、突いちや……あ、あ、んっ！」

「ふあっ、ふ、くあっ、あああんっ、先輩っ……  
しゅごいっ！ あ、ひっ、はひいっ！ スピー  
ド、ん、あ、あっ、速いれすう……！」

「ん、あん！ あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ  
あぁっ！ ダ、ダメ………！ 声、恥ずかしい、の  
にい………！ ん、んな！ そんなパンパン」

---

天音

「あ、ああっ、す、すごいっ、下からの、突き上げが、あ、ううっ、強くて、あ、あっ、すごいのが、か、体の中に、ひ、んんっ、響いて、きます……！」

天音

「ん、やあん♪ ああ……！ あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ……！」

天音

「ふあ、う、ああっ……あ、あ、ああああっ……やあ！ し、子宮の近く、ゾリゾリ擦られて……ん、はひゃああっ！ あ、ああ！ 声が、我慢できないですよっ……！」

天音

「先輩の力りが、んああ♪ 良いところお……♪ 私の気持ちいいところゾリゾリ引っ搔いてきてえ♪ ん、あ、あ、あ、ああ♪」

天音

「んああ！ あ、あ、あ、あうう……！ ん、ふう、ふう、ふうう……！ ん、んん……声、我慢できないならあ……！」

天音

「はむ！ ちゅ……れろれろ……ちゅ、ん、ちゅ♪ れろぷちゅ……ちゅ……れろれろ……ちゅ、ん、ちゅ……！」

天音

「ちゅぱあっ！ はあ、はあ……先輩の口で、私の口、塞いでください……！」

---

---

天音

「ん、ちゅ……れろ、れろれろ……ちゅ、ちゅ、ん  
く……じゆるる……じゆるじゆるじゆる……  
…んちゅ♪」

天音

「ん、んん！　ぷはあっ！　はあ、はあ……ちゅ…  
…れろ、ん……ちゅ！　ん、ああ！　あ、あ、  
あ、ああ……！」

天音

「先輩っ、あ、んああっ、先輩い……！　すごく力  
強くて……あ、ああっ、男らしいですう……！」

天音

「こんな……んあっ、あ、あ、あ、ああっ！　ずつ  
と……こんなのなら、んもうっ……！　我  
慢、で、できないっ、ですう……！」

天音

「んふああっ！　あ、ああ！　深くう、んんっ、  
もっと深くう、先輩っ！　あ、あ、あ、ああ  
あっ、子宮の奥まで突き込んでえっ……ふあ  
ああっ、赤ちゃんのお部屋犯して欲しいで  
すうっ……！」

天音

「そしたら、あ、はあ、はあ……もっとお、気持ち  
良く、なつてえ……ん、ああん！　あ、くあ、  
あ、あうう……ふう……あ、あああっ、もっと、  
子宮からエッチ汁溢れてえ……ん、ひゃああっ、  
気持ちいいと思いますからあ……！」

---

---

天音

「んあっ、あ、あうう……！　もっ、と、は、は、  
はひい……強く、ん、あんっ、激しく、い、いっ  
ぱい、して、ほしい、ふああんっ、あ、あ、あ  
あっ……このまま最後までえ……してください……  
……！」

天音

「私も、んん！　先輩が気持ちよくなれるように、  
頑張りますからあ！　ん、あ、あ、あ、あ、あ、  
あ、あ、ああ……♪　ん、んん……！」

天音

「ほら、こうやって、お腹に力を入れて……ん、  
ふう……それ！　きゅっきゅ！　きゅっきゅう  
う……！」

天音

「はあ、はあ……先輩、どうですか？　こうやつ  
て、膣圧できゅっきゅすると、ん、あん！  
はあ、はあ……もっと、気持ちいいですね？」

天音

「え、えへへ……いつかこういう事するかなって  
思っ、て、お風呂とかで練習してたんです……ん、  
んん！　あ、あ、あ、あああ！」

天音

「はあ、はふう……やあ、これ、きゅっきゅする  
とお、私も……子宮きゅんきゅんしちゃってえ  
……ん、ああん♪　ダメ……感じすぎちゃう……  
……」

天音

「はあ、はあ……こ、これえ……ほんとダメです……  
……ああっ、私……わ、私いつ、ひ、ん、イクッ……  
……イっちゃ、いそうです……！」

---

---

天音

「んああ、あ、あ、あああ！ あうう、はあ、はあ……せ、先輩も……？ く、う、ああっ、先輩も、イ、イきそうに、あ、ああっ、なってるんですか？」

天音

「はあ、はあ……んん、だったら、もう……ん、んんううっ、このまま、で、いいですからっ……！」

天音

「はい、このまま、んあ、あ、ああっ、私の中に……だ、出しちゃって、ん、ひいい！ はあ、あん……♪ いい、ですからあ……！ きて、くださいいい！」

天音

「私の中に……んあっ、ふあ、ひああっ！ んんっ！ 子宮の奥……赤ちゃんのお部屋にい！せ、先輩の……くあっ、先輩の精液……ふあっ、あ、あああっ、ぴゅっぴゅしてくださいっ……！」

天音

「ん、ひゃあああっ！？ ま、また……！？ お、おおお！ こんな、腰振り、激しくなるなんて……！？」

天音

「あん、あ、あ、あ、あああっ、お、おおお！こんなに突かれたらっ……はっ、はひい！ んおお！ お、おおお！ 私い、もうっ、んんんっ、イ、イグうッ、イ、イっひやいますよおおっ……！」

---





---

天音 「ん、んん……！ あ、あ、あ、ああ……で、で  
るう……おしっこ出ちゃううう……！」

天音 「ん、ひうううううう……！ あ、あああ……  
…… や、やだあ……！ 今日だけでお漏らし何  
回もお……ん、んん……！」

天音 「は、はひゅうう……せ、先輩い……先輩先輩先輩  
先輩いい……はあ、はあ……んああ……先輩にか  
かってるう……」

天音 「ああ……精液塗れの先っぽ……私のおしっこで  
洗い流してますう……ん、やあ……あうう……恥  
ずかしいですう……」

天音 「はあ、はあ……はあ……はふうう……ああ、やつ  
とお漏らし……止まりましたあ……」

天音 「はあっ……はあっ……はあああっ……まだ、  
お股ヒクヒクして……心臓……バクバクいつてま  
す……」

天音 「す、すごいですよね……初めてなのに、2人一緒  
に……イける、なんて……」

天音 「なんだろう……この気持ち……お漏らしいっ  
ぱい見られて、匂いまで嗅がれたのに……でも胸  
がいっぱい……すごく……幸せです……  
……♪」

---



---

天音

「私と先輩って……なんて言うか………こう……  
……心と体の相性がいいのかもしれないね」

天音

「とっても……何だか……うん、嬉しくて……最高  
な気分です……」

天音

「先輩……もう少し……雨が止むまで……このまま  
一つになったまま……抱き合っていていいですか？  
……はい、このまま一緒に……雨が止むまで一  
緒に……ずっと……一緒に……」

---

	トラック06
天音	「はあゝっ、雨、上がりましたねゝ……………さっきまでの天気が嘘みたい」
天音	「すごい土砂降りだったからいつやむんだらうって思ってたけど、ちょうど良かったですね」
天音	「あ、見てください。西の空があんなに赤くなってる……」
天音	「元々下校するのが遅かったですけど、思ったよりも時間が経っちゃってましたね」
天音	「はい……夕焼け、すごく綺麗です……………けど、東のほうはだいぶ暗くなってますから、急いで帰らないと……」
天音	「えっ？ 体ですか？ はい、大丈夫です！ 全然寒くありませんよ♪」
天音	「どっちかって言うと……………さっきまで……………アツアツでしたので……」
天音	「あ、あはは……私、何言ってるんだろ……………は、早く帰りましょう！」
天音	「……………先輩、今日は……………ありがとう」 「……」

---

天音 「なんのお礼って……………そのう……………色々、ですよ」

天音 「ほら……………し、刺激的な体験が……………できましたから」

天音 「あ、でも、今日の事は、誰にも言わないでくださいね。お友達に自慢したりしたら……………ダメですからねっ！」

天音 「はい……………約束です」

天音 「ふえ？ 指切り？ それは……………ふふっ、先輩ったら子供みたい……………でも、いいですよ。しましようか、指切り」

天音 「ではいきますよう？ ゆゝびきゝりげゝんまゝん、うゝそつゝいたらはゝりせゝんぼゝんのゝゝます……………ゆゝびきった！」

天音 「えへへ……………約束破ったら、本当に針千本ですからね？ 肝に銘じておいてください♪」

天音 「つて、あ……………そうだ。約束ついでに、お願いがあるんですけど……………明日も……………部活の練習、付き合ってもらっていいですか？」

天音 「わ！ いんですか？ やった！ ありがとう」  
「います！」

---

天音  
「また……今日みたいに遅くなっちゃうかもしれま  
せんけど……よろしくお願いします」

天音  
「ふえ？ い、嫌っ！ べ、別にまた今日みたいな事を期待してるとか、そういう訳ではなくてですね！」

天音

「ただもしも……本当に偶然！ たまたまっ！ ……途中でまた雨に降られたりしたら……その時は……ほら……濡れて帰るわけにもいかないですから……し、仕方ないかな……って思ったり思わなかったり……」

天音

「そ、そうです！ 仕方ないことです……だから……この辺で急な雨に降られたときは……」

天音

「また……あのバス停で雨宿り、しましうね……先輩……♪」